

私はこの世に生まれなければならぬ務めがあって生を与えられましたが、昭和十年の時世では、今と異なっていくら当人同士が好きおうても、両親が認めなければ、新しく生れる子は邪魔な子として始末されるのが定めであり、水子として流されるのが当時の風習でしたが、何故か与えられた責務のせいか、臍の緒のついたまま放置されても死なず、池田、滝本、入江、後藤、水野、片山、渡辺と養子に出されても、行った先で「せらいご」が生まれ、その度にたらい回しにされ、戻れば母の手により命を幾度か断たれ掛けたが、猫いらずでも口中火傷しても死なず、陸橋から汽車に投げ捨てられても死なず、そのたびに鬼子とされ、また里子に出され、ようやく六歳になり、非情な大人の心に嫌気がさして寺に駆け込みました。

私には、この年になるまで幾度か死地に到ることが何度かあり、酷いときには靈安室から事故に遭遇してから三日後蘇生したり、原爆の死の町広島を放浪しても死なず、三尺の雪の中を十日余も口にする物無くても、飢えて死ぬこと無く、目に見えぬ定めのままに、この聖の道である日本古来の両部神道の道に入り、定めのままに讃岐にて、身体の不自由な人と暮らし、結果はこの人の為に二十七年間、税関関係の仕事に携わり、家も建て、農地も得ましたが、式は拳

げていませんが一応夫婦となり、人並みの蓄えもしましたが、長野の一行者にそのかさされたか山姥に変身し、かねてより六十の定年後には、山に帰り亡き師の道に精進したい旨を申しているにもかかわらず、大阪にてその道をきり開くために現在の養女宅にて、日靈女の作法伝授しているおり、一方的な離婚解消と、全財産没収の憂き目に遭い、密かにかわしていた膨大な資料のみで、身に一物とてなく、真冬に夏の衣服のみで、本当に悲しかったです。

私の人生だけは、私の思うようには生きることが出来ません。いつも目に見えぬ力が大きく働いて、試練を与えてくれます。お陰で今日では、何事も定めと受けとめてはいますが、これで何とか立ち直れるかと思うと、さらに大きな試練の波が襲ってきます。不思議なことに、最初はありがたいなあと思うこともあります。がその後で必ず寂しい結末を迎えます。例えば、青山社の社長は次々と立派な書籍を出版して下さいましたが、売れるようになると、心に染まぬ講演会をしたり、無断で私の原稿を使用して、別の高価な書籍にしたりとなり、袂を分かつ結果となりました。さらに私の法脈を受け継いでくださる方が現れ、私も一生懸命頑張りました。しかしいつしか私の望む聖の道から、どんな外れていくのです。まだ正式に神祇継承もしていないのに、機関紙に継承しているかのように書いてみたり、山先達としての逸脱した数々の行為に、腹にすえかねる面もありましたが、我慢して一応の神祇灌頂までやりましたが、最後において、私の両部神道継承は、秘印を行う理智の法をもって行いますが、この方の法友に従い外儀の法で行われたので、結果的には最終印信を渡さず、

袂を分かつことになりました。

このように、今までの私には失う物も随分とありました。がしかし一方では不思議な人と人の御縁も頂きました。讃岐では随分と手ひどい面にも会い、一方的な中傷が激しく飛び交う中でも、私を信じ、いまだに支えてくださる方は森下浄心師。悲しい結末を迎えた灌頂において、本当に素朴な野の行者にふさわしい遠藤眞龍師。祖山高野山における道友金森正晃師、最後に籠神社におわす真名井の御前が、養女真鈴を与えて下さるだけでなく、和田高幸師を昨年の新嘗祭において引き合わせて下さいました。そして亡き師の力と、真鈴の協力のもとに、今回過去世における私の故郷葛木の麓、尺土に小さいながらも家を求め、神祇壇を設けることが可能となりましたが、そこへ和田氏より、籠神社の宮司さんが、よく申される新しい世紀の幕開け、天の岩戸開きのためにも失われた葛木の神祇復元を勧められ、その場所を与えられましたことは、まことに望外の喜びであります。

思えば和田氏とお会いしたとき、この方は紀州縁の和田一族と信じ、その旨申し上げたのがきっかけとなりましたが、血は、血を求めるとはよくいったものだと思います。私は葛木山中の行場に屍をさらした、出雲神祇氏族は護法行者ですが、南北朝時代、吉野朝廷が葛木の峰々を中心として、右翼側にあたる重要な軍事上の場所は、東国に対する重要な伊勢度会三郡であり、中でも伊勢の大湊港を中心として、南朝方の雄磯部（あま）一族が護れば、中国、南海、西国に対し左翼側の最重要地、和泉における堺港を和田一族が死守して

いたのであります。『姓氏録和泉国神別』によれば、「和田連、大中臣之同祖、天児屋根命之後也」とあり、和田一族は、葛木における中臣神道正統継承者役優婆塞と同じ、出雲系神祇氏族であることがわかり、奇しき因縁に驚いたしいです。現在の天野山金剛寺西方別所に、和田川が流れています。この流域が昔の和田郷（にぎたのさと）であり、その中心に美木多村大字上（現在は堺市美木多上）に、役優婆塞が霊地として感得したこの地に、蔵王権現を自ら刻み安置し小庵を設えた場所に、その後行基菩薩が、聖武天皇天平十八年、不思議な瑞光を感得し、この地において千手観音を刻み、寺院としてしたので、寺号を「普陀落山放光寺」と名づけられた寺があり、この寺の大檀越であり、さらにこの寺を中心として活躍したのが「和田山伏」であります。

この和田一族と同じ和田の神祇氏族が、当時の久世村大字和田（現在の堺市和田）にいますが、『姓氏録和泉国神別』によりますと、「和田首、神魂命五世孫天道命之後也」とあり、出雲直系の神祇氏族ですが、この地には行基菩薩の開基による多聞天王を本尊とする多聞寺があり、ここが和田山伏の根拠地の一つであれば、多聞天は当然当時の武士における持念仏であります。さらに泉州屈指の和田山伏は、葛木山岳道場の創始者法道仙人の開基とされる上神谷村（現在の堺市鉢ヶ峰寺）の鉢ヶ峰閑谷院に、さらに和田山伏の本拠地近くにある西陶器村には、行基菩薩が開基し、弘法大師も親しく留錫されたと云われる大修恵山寺にも、深い関係がありますが、和田一族の土地には、何故か神の字がつく小字が多く、さらに調べてみると、当時の陶邑には（現在の堺市北陶器、

同市田園) 大国主命が、天の羽車といわれる大鷲に乗ってこの地に参り、大陶祇の女活玉依姫を娶られた土地なりとあり、さらに大国主命の九世の孫太田根子を得たとも伝えられています。いずれにしても、大国主命を祖と仰ぐは、役の優婆塞であれば、明らかに三輪の郷周辺が、出雲一族の神郷(みわのさと)なれば、和田一族が住む土地にも、延喜式内社が多くあり、和泉における神郷ではないでしょうか。

かかる次第なれば、和田氏が、葛木神道を世に残したいと思われ、おりあることに話されるのも当然の仕儀であり、ここに隔週にわたる葛木神道講伝の機会を与えられたことは、ありがたいことではありますが、最初に聴講して下さい皆様にお願ひしたいことがあります。

龍燈の集いは、原則的に

「祖山葛木にかつて役の優婆塞が残された、出雲神事の秘事を学び、正しい神の道を学ぶ集いです。」

龍燈の集いは、原則的に

「葛木神道継承者の私は、聖行者であり、護法行者なれば、皆様の志しでもって維持し、必要文書を配布する集いです。」

龍燈の集いは、原則的に

「参加されるのも、おやめになられるのも自由です。隔週に講伝し、機会があれば神郷(みわのさと)を尋ねる集いがあります。」

龍燈の集いは、原則的に

「葛木神道の正しい道を説くも、神道における信仰を強要する事なく、ただ生かされてこの身を感じ、掌を合わせる集いがあります。」

龍燈の集いは、原則的に

「難しい教義も、会則も、すべてお断りし、ただ正しい神道の道を学び、明日への生きる心の糧となるよう、集う会を目的とします。」

☎五五八一〇〇〇四

大阪市住吉区长居東三一六一一六

和田高幸

☎06(6697)9695

☎五四一〇〇四八

大阪市中央区瓦町四一三一四 御堂アーバンライフ三〇七

片山 公壽 片山 真鈴

☎06(6201)0778

第一回 講伝の始めに

我が国は古来神の国であり、神事というものについての知識がなくては、上古の社会について語る事が出来ませんが、日本古来の正統神道とも言える、「神事秘傳」は、明治の廃佛毀釋令で闇の彼方であり、今は正しく継承されていませんし、神祇灌頂も、昭和五年京師智積院が最終であり、神事加行も現在は行われていませんので、正しい神事秘事は学びようがありません。さらに現代の物の考え方では、一句半句とても、例え神事秘事の古文書を発見しても、解説する事は不可能であります。上古の世界はすべて神が中心であり、神は日靈女（ひるめ）を通して、身近に存在しておりますが、その神は、すでに縄文時代以前に存在し、出雲の地においては、神道は発祥しております。ごく最近まで神道は弥生時代以降となっていました。考古学の研究が進み、弥生時代の前期遺跡に於いての、神社遺跡が次々と発見されていますので、やがてはその面に於いては明らかとなるでしょうが、その神社建築跡の位置をみますと、いずれも村の重要な位置か、中心近くにあります。

といいますのは、人は一人で生きるよりも、二人で肩をよせあって生きる方が、ずっと暮らしやすく、さらに多くの人々と暮らせば、狩りにおいても、農作物を育てるのにも、何かと便利です。そこで人々が群れ集うところから、そ

の場所を「ムラ」なる言葉で表し、そり小さな村の中心、もしくは重要な場所に、その土地の神を崇める場所、「杜（もり）」があり、そこには神の座をしつらえた保倉（ほくら）があります。もともと保倉は、大切な稲穂を石斧（せきふ）で抜き取り（現在でも伊勢神事では抜穂神事として行っています）、収めた稲穂の倉、すなわち穂倉が転じて、穂倉なる文字で保倉と書かれたのであります。その後この大切な保倉の中心部に、稲穂の神を「稲魂の神」として崇めるようになっていますが、この保倉（ほくら）が、転じて祠（ほくら）とよばれ、さらに祠の大なるを「杜（やしろ）」としてよぶようになっていきますから、『万葉集』などの古歌には、神社と書かずに、「杜」と書いて神の社（やしろ）として詠われています。

どんな小さな村でも、おのずから天地自然の災害に対しては、無力な面があります。そこで同族の血で繋がるものを主として集め、小さな村を統一して大きな村を造るようになりますが、さらに一つの大きな村の周囲を結界する事を「國」なる文字の「クニガマエ」で表し、その中に神の意に従い、その土地を収めるものを「或」なる文字で表していますが、或なる文字は神を表す銚と、神の意を伝う神子との合成字であります。國を造る苦勞は、当時としては並大抵の事ではないですが、ここから「くにうみ」なる言葉が生まれたのであります。國となる杜（やしろ）も、それだけに立派なものとなり、他の部族に対して誇示する目的から、その後の一国一城の壮大な城と同じ意味あいの、大きな社殿が作られた結果が、雲を突くかつての木杵大社（出雲大社）であり

ます。

大王家に対して、我が神祇一族の優れた力を示すための大社には、選ばれた日靈女（ひるめ）が、一切の神事（かみつわざ）を行っていましたが、日靈女は、一族の中でも、頭腦の面にも優れたものが多いですが、鬪争的な男（お）の子と異なり、農耕に関するすべての技術も、農耕に関する神事（かみつわざ）も、あらゆる部族間の政（まつ）りごと、すべて神との間に身を置き、中を取りもち、日々励んできましたが、それらをまとめて「國造家の神事方式」とされていきますが、その後、丹後、京師を経て神郷（みわのさと）を、出雲と同じ地を求めて造りあげたのが御輪（現在の三輪）であり、ここにおいて倭比賣命（やまとひめのみこと）は、出雲神事のすべてを継承し、深い前世の約束事において、伊勢の地に入り、伊勢神宮を創設された後、新たに神事（かみつわざ）を細々と定められたものが、通称「鈴之神事秘傳」であります。

此の書は当然門外不出の秘傳書とされていますが、後に鎌倉時代に叡尊僧正が、膝を屈して渡會家の門を叩き、これを伝授されたのでありますが、叡尊僧正は、純然たる神事方式のものを葛木の一族に託したのが「葛木神道」に残り、純然たる佛家方式を「菩薩流神道」に託し、両部方式を「大御輪神道」へ残されたのでありますが、私は縁があつて、琵琶湖の湖畔にある闕伽井の寺 勸学院は当時の宗務総長中村尊師より、天台寺門に傳わる赤白二◆（シ帝）論に基づく柱源神法の手ほどき受け、その後四国遍路修行の御蔭で、阿波国剣山法螺貝滝にて法螺貝山人元浄より、京師理性院流の神事を学ぶとともに、出雲國造家

帝

に長年封じられし、「神事秘傳」のすべての伝授を受けてより後、神代からの秘傳書である『古事記聞書傳』と、この『鈴之神事秘傳書』の口頭伝授をば受け、さらに弘法大師御自ら手を染められたと云う両部神道の秘事をば明かされた後、命により高野山に上り、正統御流神道の秘事を水原堯榮下より学び、次いで西大寺元長老金田元成尊師より、菩薩流神道、大御輪神道、葛木雲傳流の神道灌頂を受け、最後に両部神道の奥義、伊勢古流倭比賣命直伝の鈴之神事を受けた次第です。その間二十余年。長いような時が流れましたが、学び終えたときに、これらの秘法を明治まで連綿として、守り、維持して来られた方々のご苦労を思いやると、目に熱き涙が溢れ出しました。浅学愚鈍の身では、その膨大な秘法、秘事の数々をいかに後世に残すべきか、苦慮惨憺の日々でしたが、師のお言葉どおり、六十なかばの坂を迎え、ようやく良き養女眞鈴が与えられ、資料のまとめに入り数年にして、叶わぬ長年の夢である、葛木の麓に立ち返れることが出来、この喜びはいかばかりか。まこと葛木こそ、私の前世の眠れる場所であり、私の血の源が秘められてところでありますが、この山に幾多の護法行者が眠れる聖なる山であると、かつて師より教導を受けたおり、葛木神道の口伝に、法華山岳行者である役の優婆塞の秘事があり、同じ佐伯部山岳行者空海優婆塞が、役の優婆塞の御跡を慕い七年間に互り難行苦行され、求聞持の秘法開眼をはたさんと、葛木は鳴滝より、託宣により朝熊山（あさまやま）に入り、雨寶童子を天照太神より授かり、明けの明星の指し示す明かりの果て伊勢地より、熊野をへて、重畳山神王寺にいたり、遙か彼方の水平線上に昇る太

陽に、始めて大日如來、天照太神の秘事を悟られ、ついに葛木連山は金剛山に於ける秘事を説き明かされたのであります。その秘事とは、葛木金剛山こそ神佛と共に一体化した聖なる場所なれば、我が国は神が造り玉ふなれど、その根源に於いて大日如來の働きもありとして説かれたのが、葛木神道極秘伝の中にある『大日如來海底鑿字』であり、ここより、両部神道の道を説きおこされたのであります。

葛木山は金剛山こそ、明治の廃佛毀釋令に於いて焼却された『古事記聞書傳』の中に書かれてある「神話創設の地」でもあり、さらには『鈴の神事』に説かれてある神事（かみつわざ）の源でもあり、この地こそ、葛城王朝秘卷に説かれたる神代の創設の地なれば、正統葛木神道継承者役の優婆塞は、葛木の秘事を筆にとどめること十卷。これを思うことありて同じ国造家一言主神社の寶庫に託すに、これを世に残すことを拒む大王家縁の神官の手により密かに葬り去られています。このことは行基菩薩が天皇の命に縊り、葛木の秘事を明らかにせんと返還求めるも叶わず。無念の思いを『金剛山秘記』に書き残されています。

今この秘事を明らかにすると、遠き古の時代 東の地の果てにおいて、卒塔婆の裏面に書きたる鑿字が静かに横たわりしと。ときをへて神の国として、この海底鑿字状の大地は、地上に隆起し、神々が住み玉う高天原なる世界より望めば、この鑿字なる大地は、富士火山地帯を軸として、大きく蝦夷地なる頭を北に向け、能登半島と 伊豆半島に第一の羽根とすれば、島根半島と紀伊半島

が第二の羽根を描き、九州 薩摩諸島は蜻蛉の尾となるなりと。ここより秋津嶋（あきつしま）蜻蛉（とんぼ）の國が生まれたる所以（ゆえん）なり。蜻蛉の命は葛城に有り。ここより慈雲尊者は葛城神道を紐解き始め、大倭（やまとなる）豊秋津嶋（とよあきつしま）は、まさに天御虚空（あまつみそら）豊秋津根（とよあきつね）なりと説き玉われたのであります。『古事記』における、国々の誕生神話は、大王家に於いては、大八州（おおやしま）なれば、今の淡路島を中心地として開け行く大和大王家を表す国として、八ヶ国を選んでいますが、出雲國造家では、この蜻蛉でもって国々を説明されておれば、さらに空海阿闍梨は、裏ありて表あり。表ありて裏あり。地ありて空あり。空ありて地あり。陽ありて陰あり。陰ありて陽あり。それぞれ事物は一つでは成り立たず。我が国に於ける神佛も同じく本来は一体なりとして、説き起こされたのが両部神道であります。

ここに於いて大切なことは、我が国に於ける神道に二つの異なった道があります。一つは天と云う絶対的な神「天之御中主神（あまのみなかのぬしのかみ）」をいただく大和大王家の神道と、国という絶対的な神「國常立之命（くにとこたちのみこと）」をいただく出雲國造家の神道であります。『古事記』は、大王家には、悲しいかな國造家のように整った神話がありません。そこで大王家の命により、大王家の都合の良いように作らせたために、あのような全然異なる書き方の『古事記』が生まれたのであります。

『古事記聞書傳』によりますと、この葛木家に伝わる『古事記』を書く者。

出雲神祇氏族葛木家のものなり。ある日 葛城北麓より大和川に沿いて下り、始めて大いなる河内湖に出会い驚く。さらに湖に沿いて歩み、湖に注ぐ滔々（とうとう）と流れる川の水量（みずかさ）に驚き、一帯の生い茂れる葦のたくましさに感動を深めるだけでなく、更に西側に多く見られる低湿地帯を見、まさに我が国の成り立ちと感じたいりたり。すなわち落ち着いた東側の三角州と異なり、多くは水の流れに身を任している浮き島の集まりが、やがては集まりて湿地帯となるさまは、まさに新たな国の成りたつを説くに相応（ふさわ）しいと思えり。遠く出雲國造家の血を引く故か、大王家の天御中主命を祖とする神話に、頑（かたく）なに耳を傾けず。國造家に相応（ふさわ）しき神話を求めての旅路の果てに得た新たな知識に感動す。すなわち天地の始めはかくの如く、国土は水に浮く浮き島の如き様なれば、ここより新たな生命葦の如き、強靱な生命を与えられし神が生じたりと。まさに国の最初の神なれば、「國之常立之神（くになるは とこたちのかみ）」と名づけ、出雲國造家なる國土が 永久（とわ）になりませる事を秘めたりと。神の命を受け、浪速江（なになえ）の葦原の郷（さと）において 葦の芽を芽吹かせるための、新しき土地の造成の全責任を与えられし神を「國之狭土之神（くになるは さずちのかみ）」と名づく。新しき国土に出来るなれば、葦以外の生きとし生ける者の命の糧豊かなる作物も、この土地に育み守らせ玉へと願いをこめて、「豊斟之神（とよくんぬのかみ）」と名づけ玉いしと。漂う浮き島は、砂と泥土多く未だ治まらぬさまは、まさに春の野に遊ぶ乙女心。ここより「沙土煮之神（さずちにかみ）」と名づけ、乙女の心を落ち着かせるために、二人合わせて泥土を固め玉う、新たな土地を守護なせる神を「泥土煮之神（ういじにかみ）」と名づけたたりしと。新しき大地が再び水に流されることなく、必要に応じて川面（かわも）に向かい杭を打ち、土留めの工事を行いて土地を守るだけでなく、新しき作物を育てるために、寝泊まりする建物を新たに拵えたまう神を「大戸之道之神（おおとのじのかみ）」と定め、作物の種蒔き育苗・収穫・保存を受持つ神を「大苦辺之神（おおとまべのかみ）」と定め、いずれもこの世に人を住まわせるための神として描きたまうなり。

いよいよ神の子を、人として此の世になりませるために、最終段階の神として、面立ちの整ひし麗（うるわ）しき女よ。我が腕に來り、我に貴女のすべてを与えよとして「面足之神（おもたるのかみ）」大地に降り立てば、「何と恐れ多いことよ。宜しくば我が胸乳を捧げんとせし神を、「惶根之神（かしこねのかみ）」と名づけ玉うなり。かくして神代（かみよ）七代の最後の神「伊奘諾之神（いざなぎのかみ）・伊奘冉之神（いざなみのかみ）」を説き玉うと。

慈雲尊者も、かくの如き秘事をたちまちに悟らせ玉いて、ついに菩薩流神道をおこされ、日々の研鑽に励まれ、さらには日本古来の神事の秘事を、伊勢は渡會家に於いて伝授を受け、その教えのすべてを葛木雲傳流神道として集大成なされたのであります。まことに伊勢に於ける神道なるは、倭比賣命（やまとひめのみこと）が開かせ玉う神道でありますが、弘法大師も伊勢の地にて神道を学ばれて後、新たな神道の種子を、伊勢の柱に蒔かれたのが、その後縁あつ

て叡尊僧正が、天照太神御自ら託宣によりて授かることになり、その後の眞言密教に基づく神道秘事を創設なされたのでありますが、鈴之神事秘事に基ずく、託宣方式のみは、時代が変わっても変わる事なく、菩薩流神道の最極秘伝として、渡會家、西大寺に継承されて来ましたが、時代の新しき夜明けと称す、純国学者や、国粹論者の手によりて両部神道は時代の血祭りに上げられ、すべてが抹殺されることになり、闇の彼方へと消えて行き、現在ではその面影忍ぶものはありません。維新までは確かに西大寺秘庫に眠っていましたが、廃佛毀釈の嵐の前に両部神道の幹が倒れ、貴重な資料が散逸し、焼却される中において、大圓大阿闍梨は、後事を元成尊師に託し開かれたのが昭和五年の最後の神祇灌頂であります。その後資料の整理中、元成尊師は伊勢渡會家、菩薩流神道の大法の中に、日靈女（ひるめ）之作法欠如しているのを不審に思われ、密かに西大寺秘庫に入り、鈴之神事・松橋流・菩薩流・大御輪・葛木雲傳流の秘書を、その後京師に聖徳太子縁の白毫寺に移管せられたのでありますが、不祥な私が、法螺貝山人の命により、尊師の最後の弟子の身となって、各秘書を預かることになりましたが、数多くの神道秘事を後世如何にして遺すべきか、随分と悩みましたが、今日眞の聖行者の道を歩む者もなく、なす術とてなく、片や断法の罪に戦きながら、六十の歳を越して始めて、同じ國造家の血筋を引き、過去世において日靈女でありし女（ひと）に巡り会うことが出来たのであります。その女（ひと）は生活（たつき）を古代氣功の道に生きておられる方で、古倭（やまと）にかつて伝わりし術を、弘法大師三媛（さんし）の一人と言わ

れる真名井御前（まないいごせん）より、心づかぬままに体内に自然靈承されている方で、その救われしもの多しと聞き及んでいます。その道をさらに究めんと凍てつく滝に向かう熾烈さは、ともに教導することの出来る人はいません。知らず知らずして弘法大師に救めるようになられたことが、やがて鳥取における高野山主催の研修会に出席なされる奇縁となり、それより後、膨大な資料と、着の身着のままの私の養女となって、日々の世話に預かるようになり、ようやく資料のまとめに入ることが出来たのであります。

生きる事は真に大変であります。まして日々の生活（たつき）においてはなおのことであります。神佛の道を一筋に歩みながらも、此の道を究めんとすれば、その時間を得んとするだけでも、亦た大変な難事ではありますが、後世のために、今日抹消された両部神道の秘事である、正しい神事（かみつわざ）を残さんとする心からなれば、よろしくその意をお汲み取り下さり、学ばれますことを切に望みます。

最後に我が師法螺貝山人、水原堯榮、金田元成、並びに護法先徳にこの書を捧げ、正法弘通の寄与せんと機会をくだされし東方出版社社長、編集員の方々、さらには、生活のすべてをみ、筆一筋に生きる機会を与えてくれた養女眞鈴に感謝いたします。